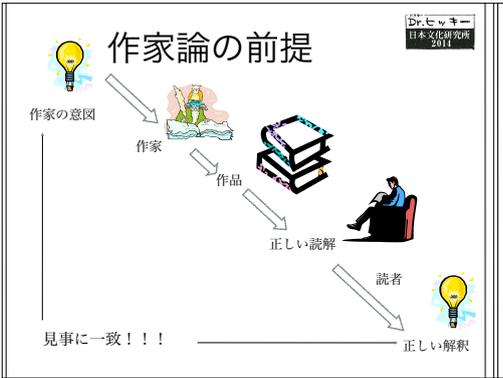




近代文学講義
作家論を超えて
—ニュークリティック—

1



2

- 作家論の証拠**
- ①、作家の残した文章 (日記・雑記・エッセイ等)
 - ②、作家の親族や知人の証言
 - ③、作家の伝記事項
 - ④、作家の原稿の校正過程
 - ⑤、作家の生きていた時代・場所・環境

3

作家論の結論

作品の中に作家の倫理観 (道徳観) を見る
作者の示そうとした思想は正しいか

作品の中に作家の実人生の反映を見る
モデル探し (モデルとの比較)
具体的な地名探し
事件探し (実事件との比較)

4

- 作家論への疑問**
- ①、作家の残した文章 (日記等)
作家は日記が公開される可能性を知っている
そんな日記に本当のこと書くか?
 - ②、作家の親族や知人の証言
人の記憶ってそんなに正確か?
同じ出来事が人によって記憶が違ってこない?
 - ④、作家の原稿の校正過程
過程から結果ってわかるか?
 - ⑤、作家の生きていた時代・場所・環境
人って時代に従順な場合も逆らう場合もあるよ

5

各国で反作家論が生まれる

ロシア・フランス (構造主義)
ドイツ (読者論 (受容理論) ヤコブソン レヴィスト イギリス (新批評 (ニュー・クリティック))
フランス (ナラトロジー) 従来作家論 日本 (作品論 (三好行雄 など))
ロシア (話形理論) プロップ など

6

イギリスの新批評の誕生

I.A.リチャーズ (Emotional VS Referential 文学の自立性) W.エンブソン (ultra-close reading) F.R.リープス (close reading モラル 経験至上主義) T.S.エリオット (反ロマン主義 伝統主義 新しいキャンノン)

政治学 ↔ 社会 個人 ↔ 言語学
心理学 ↔ 文学 社会学
哲学 ↔ 具体 普遍 ↔ 歴史学

文学を独立した学問とみなす

7

イギリスの新批評

旧批評 = 人物へと還元される印象批評
新批評 = ニュー・クリティック

- ①、作家のデータをすべて排除
- ②、作品を一つの完結した世界とみなす
- ③、作品のWHAT (メッセージ) を読まない
- ④、作品のHOW (構造) を読む

8

ニュークリティックの方針

我々は……客観的な批評へ向けての障害を巧みに迂回できるであろう二本の道を探索しているのだと信じている (もつとも、実際には、この二本の道を批評や詩作は踏み外してきたのだが)。「意図に関する誤謬」とは、詩とその起源とを混合することを指す。……意図に関する誤謬は、批評の基準 standard を詩の心理学的な原因から引き出してこうとすることから始まり、最後には単なる自伝や相対主義に陥る羽目になる。「情動に関する誤謬」とは、詩とその結果とを混合すること (つまり、詩が何であるかと詩が何をすることとの混合) を指す……。情動に関する誤謬は、批評の基準を詩の詩の心理学的な効果から引き出してこうとすることから始まり、最後には印象主義や相対主義に陥る羽目になる。どちらの誤謬にせよその行きつく果ては、特にも批判的判断の対象であるはずの詩そのものが消滅していくことである。

(Wimsatt & Beardsley 1949, p.21)

「意図に関する誤謬」
「情動に関する誤謬」

9

「意図に関する誤謬」

作者の構想ないし意図というのは、文学作品の成功を判断する基準としては、役に立たないし、望ましくもない……。 (Wimsatt & Beardsley 1946, p.3)

何故か？

10

何故、作者の意図を読んでは ないか

確かに、作者は意図をもって作品を作った。しかし、詩を作った原因として意図の存在を主張するからといって、そのことは、詩人の作品の価値を判断する基準として意図を見認することにはならない。

そもそも批評家は、どうやって「詩人がやろうと思ったこと」を知るのだろうか。仮に詩人がやろうと思ったことが成功すれば、それが作品という形になって現れるだろう。しかし、詩人がそれに成功しなかった場合、作品は作者の意図を確証する証拠にはならない。言うまでもなく、この「成功したか否か」自体は批評家には知り得ない。

とすれば、作者の意図を推測できるとすれば、それは作品が批評家の眼前で作用しているから、つまり、そこに存在しているからである。それゆえ意図とは、今ここに現前する作品から事後的に抽出した操作概念に過ぎず、敢えて作品の批評に作者の意図を持ち出す必要などない。

11

「情動に関する誤謬」

……我々が提起してきた意味論的分析は、こう述べるだろう。たとえ最終段階であっても、純粋に感情による詩歌など幻想に過ぎない、と。

(ibid., p.37)

何故か？

12

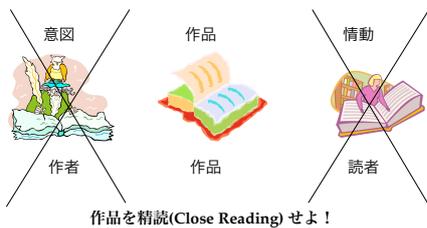
「情動に関する誤謬」

読者たちの感想というのは……別段反論されるものでもなければ、かと言って、客観的な批評家が考慮に入れられるものでもない。純粋に情動的な感想は、あまりに心理学的過ぎるか、あまりに曖昧過ぎるのである。ヘーゲルがたびたび指摘していたように、感情とは「純粋に自分自身の主観的な事柄以上のものではなく、そこでは、その感情の具体的な原因は消滅している……」のだ。[感情の一例として] 生き生きとは、それによって作品が鑑定されるような、作品に内在する事柄ではない。そうではなく、それは[人間の] 認知構造の結果なのであって、事柄なのはこの結果の方である。

(ibid., pp.32-33)

13

ニュークリティックの文字



14

ニュークリティックの文字

文学とは

- ①、パラドックス
- ②、アイロニー
- ③、曖昧さ
- ④、テンション
- ⑤、普遍的テーマ
- ⑤、有機的統一性

という要素を持った文章芸術である。

15

